

第 4 章

『ネザー・ワールド』

(*The Nether World*, 1889)



Luke Fildes (1844–1927), “Houseless and Hungry”
The Graphic (April 12, 1869)

作品の梗概

最初の場面は、1880年頃の3月の日暮れ時、70歳くらいの老人がロンドンの広場クラクンウェル・グリーン (Clerkenwell Green) を横切っているところである。この老人の名前はマイクル・スノードン (Michael Snowdon) で、彼はオーストラリアから17年振りに帰国して以前この地区に住んでいた自分の息子を探している。たまたま使いでビールを買いにパブに来た孫娘のジェイン・スノードン (Jane Snowdon) はその話を聞く。ジェインの父ジョウゼフ (Joseph) は彼女をクラクンウェル・クロース (Clerkenwell Close) で下宿屋をしているペコヴァ (Peckover) 夫人に預けて行方が知れなくなっている。ジェインは13歳位で、下宿屋で下働きをさせられている。

ジェインはシドニー・カークウッド (Sidney Kirkwood) を呼びに行く。ペコヴァの下宿人のジョン・ヒューイット (John Hewett) に呼んでくるように頼まれたのだ。この仕事はジェインにとって楽しいことだ。シドニーはクラクンウェル地区に多い宝石加工業の職人であるが、ジェインに同情してくれている、ほとんど唯一の人である。実際は1ヶ月に1度くらいしか会えないのであるが、彼と話せると暗い生活がはっきり明るくなる感じであった。母親と死別し、父親が家を出たあと、ジェインは友人としてシドニーを頼りにしていた。

この日もシドニーは優しい。いっしょにペコヴァの下宿に向かって歩いてくる途中、着る物も十分与えられず、しかも雨に濡れて寒くてごえているジェインにシドニーは自分の上着を脱いで着せてくれる。

ヒューイットがシドニーを呼んだ理由は、先妻との娘クレアラ (Clara) について相談するためだ。クレアラは17歳で、紋章や住所を版木で押すという地味で低収入の仕事をしているが、底辺の生活に嫌気がさしている。父ヒューイットは、労働者階級ではあるが、あるとき400ポンドの兄の遺産が入った。そこで娘のクレアラを貧乏人の行く公立学校ではなくて教会経営の学校に入れた。ピアノも習わせた。クレアラは教師への道を目指したが怠惰なためうまく行かなくて現在の職業についているが、それに満足していない。彼

女は何とかして下積みの生活からは出したい。1年ほど前、シドニーに求婚されたが断った。彼は労働者としては教養もあり洗練されているが、クレアラは彼と結婚して労働者階級にとどまりたくない。クレアラは今、地味な仕事を止めて、食堂兼酒場に勤めるようとしている。労働者階級でない人たちと少しでも接触したい。父のヒューイットはそれに絶対反対である。そんな職場では墮落すると思うのである。親しい間柄のシドニーに頼んで引き留めてもらおうとする。それで彼を呼んだのである。

他方、シドニーを呼びに行き帰ってきたジェインはペコヴァ夫人の娘のクレム (Clem) のひどいじめにあう。この日は母親が縁者の葬式の連絡で外出しているのをいいことにクレムはジェインをいじめる。小銭を盗んだと言いがかりをつけて、縁者の遺体がある部屋に連れて行き、一晚そこで寝かせようとする。いやがるジェインを力づくで引っ張って行く。恐怖でジェインは悲鳴を上げ、それを聞きつけてクレアラが来てクレムのいじめをやめさせる。しかしこれがもとでジェインは精神に異常をきたして病気になってしまう。意識不明の状態ではジェインはシドニーの名前を呼ぶ。

スノードン老人が孫娘のジェインの居場所を聞きあわせてやってきたのは、ジェインがこういう状態にあるときだった。まもなくジェインは病気がなおり、祖父に引き取られてベッシー・バイアス (Bessie Byass) の下宿と一緒に住むようになる。老人は数万ポンドの莫大な財産を持っている。長男のマイクルがオーストラリアでひと財産をつくったのだ。老人はその長男の所にいたのだが、息子が死に、孫も事故死して家族がいなくなり、財産はすべて老人の所有になった。そこで老人は帰国してロンドンの息子を探した。そして、孫娘だけは探し出した。老人は財産についてひとつの考えを持っている。貧乏人のために使うというのである。老人自身、若い時に苦勞した。13歳の時両親と死別し飢えと寒さに苦しんだ。飢えて犬の食べ残したのものも食べた。貧乏の苦しみを思い出し貧乏人を助けるために財産を使おうというのである。そしてジェインに貧民救済の仕事をさせようとする。ジェインは淑女として遊んで暮らすことは許されず、働きに出される。財産は貧乏人のために使うのであって、個人の安楽のためではないというのである。

クレアラが食堂兼酒場で働くことについて、シドニーは反対しない。金持ちの娘なら働かなくてもすむが、労働者の娘は自分で働いて生きていかねばならないのだから、気のすむような仕事をさせねばならないという。誘惑に負けて墮落してしまうことがあるかも知れないが、不幸な目にあって身を滅ぼす例を見ているから、かえって用心深くなっているとシドニーは言う。

クレアラの家出を引き留めないことで、ヒューイットはシドニーを非難する。この後ふたりは疎遠になる。食堂に勤めていたクレアラは芝居関係に知り合いのある知人スコートン (Scawthorne) とたまたま会い、すすめられて女優になることを決意する。偶然、学校友だちのグレース・ラッド (Grace Rudd) が女優になっていると聞いて競争心をかき立てられ、劇団に入り、女優として有名になることを目指す。

こういふとき、ジェインの父、ジョウゼフが現れる。彼は妻が死亡したあと、娘ジェインを下宿屋をしているペコヴァ夫人に預けて、仕事をもとめてロンドンを出た。アメリカにも行った。しかし仕事はうまく行かず、10年振りにロンドンに舞い戻ってくる。そしてクレムに求婚する。彼女と結婚すれば経済的に安定できると思ったからである。クレムの方はクレアラの兄ボブ・ヒューイット (Bob Hewett) が好きなのだが、ボブにはその気がない。クレムはスノードン老人が財産があるということを知ってジョウゼフと結婚する。息子と結婚することでその財産を手に入れることができると期待する。両方とも金目当ての結婚である。

ボブはペニロウフ・キャンディ (Pennyloaf Candy) と結婚した。ペニロウフは縫製の仕事をして、わずかばかりの収入を得ている。クレムと違っておとなしく、どんな無理をいっても我慢するタイプの女性である。クレムはボブに惚れこんでいて、彼がペニロウフと結婚したあとも取り戻したいとつきまとい、邪魔になるペニロウフを殺そうとする。ボブは型彫り師であるが、その技術があだになって贖金づくりをはじめ、それが露見して警察に逮捕される。ペニロウフの母キャンディ夫人はアルコール依存症で金があればそれが家賃でも全部飲んでしまう。夫はパン職人であったが酒びたりの妻に腹を立てて殴打した。妻は怒って夫を告訴した。その結果、夫は愛想をつかして家を出てしまう。息子のスティーヴンは酒場で働いているが、母親を見捨てることはなく、できるだけ面倒を見ている。

女優を目指してクレアラが去ってしまったあと、シドニーはジェインとさらに親しくなる。老人とジェインとシドニーは一緒にエセックスに小旅行する。シドニーは老人の貧民救済事業の理想を肯定できない。ジェインには救済事業をする能力はない。彼女は家庭的な女性である。自分と結婚すれば彼女は幸福になるだろうとシドニーは思う。他方、ジョウゼフは父が財産を持っていることを知り、その財産がジェインと結婚することでシドニーのものになることを恐れている。良心的なシドニーは自分が財産目当てで求婚したと思われたくないため、求婚をしぼっている。

ヒューイト夫人マーガレット (Margaret) は病気がちである。娘時代に彼女は縫製の仕事をしていて、仕立てた服を盗んだ罪で刑務所に入れられた。低賃金で収入は下宿代に取られて食べることができず盗みを働いたのである。しかし犯罪は犯罪だということでは有罪の判決であった。その頃妻と死別していたヒューイトは、貧乏な労働者への冷たい処置に義憤を覚え、出所してきた彼女と結婚した。マーガレットは結婚前にくればれば生活はよくなったが無理がたたって体をこわしていた。妻が死亡するときのことを考えてヒューイトは葬式互助会に入って積み立てをしていたが、その金を持ち逃げした者がいて積立金は入らなくなった。夫人が死亡したときヒューイトには葬式を出す金もなかった。それを救ったのがシドニーである。かつての不和を忘れてシドニーは病床の夫人を見舞う。夫人はもしクレアラが戻ってきたら暖かく迎えてくれと義理の娘のことをシドニーに頼む。

シドニーがジェインに求婚するのをためらっているところに、女優になる望みを失ったクレアラが戻って来る。彼女は学校友だちのグレースと同じ劇団でイングランド北部の巡業に出た。しかしクレアラは自分には、たいした役が回ってこないのが不満であった。あるとき主役の女優が座長と意見が合わず、劇団を突然やめた。代役として、経歴の長いグレースを出し抜いてクレアラが抜擢された。グレースは嫉妬のあまり、クレアラの顔に硫酸をかけた。そして自分は鉄道自殺した。クレアラの女優生命は終わった。

クレアラは自宅に戻り、かつて自分に求婚したことのあるシドニーを呼びだして会う。今や彼女はシドニーに頼らざるを得ない。シドニーはかつて自分の求婚を断った女性ではあるが、未練がなくなったわけでもない。同情する気持もあるし、また顔の様は変わっても愛着はあり、彼は再度求婚し今度は受け入れられる。シドニーはクレアラの生活だけではなくて子供の多いヒューイト家の生活までみななければならない。

ジェインはベニロウフの精神的な支えになっている。ポブはベニロウフと結婚しながら、彼女がおとなしいのをいいことにいじめる。生活費さえろくに渡さない。クレムの言いなりになって彼女をいじめる。そういう苦しいときにベニロウフが頼みにし相談相手にするのはジェインである。幼い子供が死んだとき慰めを求めてベニロウフが行ったのはジェインのところである。ジェインはいつも惨めな状況にいるベニロウフを暖かく迎え入れ慰める。

スノードン老人はジェインを教育して自分の財産を使って貧困者を救済しようと考えていたので財産の大半をジェインに贈与する遺言状を書いたのであるが、ジェインは自分にはそれだけのことをする能力がないと言ったので

老人はその遺言状を破棄した。新しい遺言書をつくる準備をしている間に急死する。遺言状がないので老人の遺産はすべて息子のジョウゼフのものとなる。ジョウゼフはそのほんの一部をジェインに与えたものの、妻を捨ててアメリカへ逃げる。

ジェインはアメリカにいる父親に手紙を書いて仕送りを断る。自分で働き生きて行くことを決意したのである。そういう立派な考え方にひかれてスコートンはジェインに求婚するが、ジェインは断る。シドニーへの愛を心に抱き、ひとりで生きて行くことを決心した。他方、ジェインは周囲の人の支えになる。自分が下宿しているバイアス家で夫妻が喧嘩して夫のサム(Sam)が家出したとき、ジェインは仕事を一日休んで祖父からもらった時計を質に入れて交通費を捻出し、サムに会いに行き仲直りをさせる。父のジョウゼフはアメリカで投資したが失敗し全財産を失い、そして死ぬ。

シドニーは労働者階級でありながら、かつては芸術家を目指していたのだが、その望みは果たされなかった。しかしクレアラだけでなく子供の多いヒューイト一家を養うことに全力を尽くす。

祖父の1年目の命日にジェインは祖父の墓参をする。そこにシドニーも墓参にやってくる。約束したわけではなかったのだが、3年目にも同じようにジェインの祖父の墓前で二人は再会する。二人は軽く握手し1年間のことを話し合う。シドニーは芸術家にならず、ジェインは奉仕活動家にならなかったが、不幸な人々の味方になっている。

どん底に住む人々

第1節 『ネザー・ワールド』の背景

題名の「ネザー・ワールド」は社会の底辺、「どん底」の意味である。この作品は社会の「どん底」に住んでいる貧しい労働者を描いた。

19世紀イギリスは産業革命の先進国として、世界の工場として工業製品を世界各地に輸出しており、未曾有の繁栄を誇っていたのだが、その陰には恵まれぬ多くの人々がいた。当時のイギリスでは、労働者階級は、現在の読者には想像できないほど悲惨な状態にあった。フリートリヒ・エンゲルスは1842年から2年間イギリスに滞在してロンドンやマンチェスターなどの大都会における労働者の悲惨な生活を観察し、『イギリスにおける労働者階級の状態——19世紀におけるロンドンとマンチェスター』(*Die Lage der arbeitenden Klasse in England: Nach eigener Anschauung und authentischen Quellen*, 1844–45)のなかで記録している。¹ベンジャミン・ディズレーリ (Benjamin Disraeli, 1804–81)は『シビル、あるいは二つの国民』(*Sybil, or the Two Nations*, 1842)でイギリスは富める資本家階級と貧しい労働者階級に分かれた「二つの国民」になったとした。

ギヤスケル夫人は『メアリ・バートン』(*Mary Barton*, 1848)、『北と南』(*North and South*, 1855)においてマンチェスターの工場労働者のチャーティスト運動、労働争議を描いた。『ネザー・ワールド』も前述のディズレーリやギヤスケル夫人の作品と同じ系譜に入る。1880年の時点では労働者にはまだ完全な選挙権がなかった。作中登場人物のひとりのヒューイットは「普通選挙権さえあれば」(53)労働者の生活はよくなると信じている革新派である。1867年の第2次選挙法改正で一部の労働者には選挙権が与えられた。しかし1838年のチャーティストの人民憲章が主張した「男子普通選挙権」にはまだ遠かった。完全な男子普通選挙が実現するのは1918年である。女性の完全な普通選挙権は1928年までは与えられなかった。

『ネザー・ワールド』の最初の場面は、1880年頃に設定されている。(作品

中に 1873 年という年号があり、登場人物の年齢から判断すると物語の最初の時点は 1879 年から 1880 年と考えられる。) 1860 年代には世界の工場といわれたイギリスは 1873 年から「大不況」に陥った。² アメリカとドイツなど後発の資本主義国家がイギリスに対抗する工業力をつけてきた。したがって『ネザー・ワールド』では、これまでのように低賃金と長時間労働で苦しむだけではなく、不況のため働き口がすくないという、さらに困難な状況にさらされる労働者が登場する。

『ネザー・ワールド』の舞台はロンドンのクラークンウェルである。作品の冒頭にはクラークンウェル・グリーンへの言及がある。ここを舞台にしようという作者の意図が読みとれる。そこを中心としたかなり狭い範囲で物語は展開する。この地区には作品で説明されているが宝石加工業、時計製造業などがあり、その職人が多く住んでいる。どん底の人々の住むところでありスラムであり文字通り「ネザー・ワールド」であった。

1884 年 2 月のある朝、スラム改善に関心があった皇太子時代のエドワード 7 世が、労働者の服を着てお忍びでふたりのお付と護衛の警官をつれて、ホーボーン (Holborn) とクラークンウェルのスラムの実態を視察に来た。皇太子は案内された貧民街で不潔と悲惨に身の毛のよだつ思いがした。餓死寸前の婦人と彼女の 3 人のほろをまとった元気のない子供が、家具が奪い去られた部屋でぼろ布の山の上に横たわっているのを見つけて、皇太子はポケットから一握りの金貨を取り出してあげようとする、お付きの者が慌ててそれを制止した。もしそんなことをしたら、それを見た仲間の者たちが金がほしくて襲ってくるだろうというのだ。³ またギッシングが尊敬するディケンズとの縁がある。『オリヴァー・トウイスト』(Oliver Twist, 1838) のなかで掬り団に入れられたオリヴァーが、一味のアートフル・ドジャー (Artful Dodger) が老紳士のポケットからハンカチを掏るのを見たのはクラークンウェル・グリーンの本屋である。

この地域はこのような貧しい人々が住む地域であったが、同時に、ここは革新運動の中心地のひとつでもあった。クラークンウェル・グリーン広場に反体制派の人々が集合した。⁴ 早くは 1381 年、人頭税がきっかけでワット・タイラーが反乱を起こしたが、このとき一揆軍はここに結集した。1816 年、チャーティスト運動の指導者のヘンリー・ハント (Henry Hunt, 1773-1835) が 2 万人を前にして普通選挙権を訴えたのはクラークンウェル・グリーン少し北の所であった。10 年後、ウィリアム・コベット (William Cobbett, 1762-1835) は、クラークンウェル・グリーン広場で、穀物法反対の演説をした。

1832年には「人民の権利を獲得」することを目指して集会があった。そのあともこの傾向は続いた。1842年チャーティストの集会が開かれた。1842年には当時の首相のピールはクラークンウェル・グリーン広場での集会を禁止した。これにたいして銀スプーン製造者、大工、銀細工人の組合は、それぞれのバブで集会を開いていた。1902-03年にはレーニンが滞在して機関誌を発行した。(現在は革新の場所を示すものとしてクラークンウェル・グリーンにはマルクス記念図書館がある。)⁵

クラークンウェル・グリーンの広場は弁士たちが自分の意見を述べる場所であった。『ネザー・ワールド』のなかでは次のように描写されている。「当時若いシドニーはクラークンウェル・グリーンで日曜の夕方を過ごすのが大好きだった」(53)。ここで弁士たちの演説を聞いた。

Towards sundown, that modern Agora rang with the voices of orators, swarmed with listeners, with disputants, with mockers, with indifferent loungers. The circle closing about an agnostic lecturer intersected with one gathered for a prayer-meeting; the roar of an enthusiastic total-abstainer blended with the shriek of a Radical politician. (181)

その弁士のひとりでシドニーが関心を持った弁士が、同じ下宿にいたヒューイットであり、二人はこのようにして知り合った。

1887年の中頃、ギッシングはクラークンウェルによく行くようになった(Korg 109)。したがってギッシングの頭のなかには、次の作品ではここを舞台として作品を書こうという気持があったろう。しかし、このような観察からだけでは作品はまとまらなかった。作品をまとめさせたのは妻ヘレン(ネル)の死去であった。

1888年2月29日に別居していた妻のネルが死去して、それを知らせる電報をギッシングは受け取った。彼は友人のモーリー・ロバーツに電報を打って下宿まで来てもらった。そこで一晩過ごして翌日、一緒にランベスのネルの下宿に行った。彼女の部屋には衣類はほとんどなかった。何枚かの質屋札があった。夏に衣類は質に入れてしまっていたのである。ギッシングの写真もあった。彼を見捨てたわけではないことが分かった。過去半年間に署名した禁酒の誓いのカードがあった。これから判断するとネルは何とかして禁酒しようと努力したことが分かった(Korg 110-11)。

ネルの死は悲しいものであったが他方では解放でもあった。別居していたとはいえ、アルコール依存症の妻の存在は彼を圧迫していた。妻の死によっ

てふっ切れた。彼は妻の記念を作るという思いもこめて新しい作品を書き始めた。3月19日に始めて7月22日に完成した。これが『ネザー・ワールド』である。『ネザー・ワールド』はある点でネルに捧げられたものであり、ネルの面影は作中のキャンディ夫人に反映されている。

第2節 貧しい労働者の生活

コールグによると『『ネザー・ワールド』はギッシングの小説のうちで貧困以外は書かれていない唯一の小説である』(Korg 111)。しかし、貧困の程度は人物によって異なる。一番最下層はキャンディ家である。食うや食わずで、石炭は運搬車から落ちたものを捨てていると言う。その上はヒューイト家である。ペコヴァ家は下宿屋でありその上である。一番上はバイアス家である。自分の家を持ち、住んでいる地域も違う。

このような貧民の生活をこれほどまでにリアルに書かせたものは一体何であつたろうか。貧民を見ても見ぬふりをして明るい面だけ書くことはありうる。しかしギッシングはこの作品でそうはしなかった。⁶これには、当時の自然主義文学の影響がある。理想主義にまどわされることなしに、ありのままに現実を見る態度である。ギッシングはフレデリック・ハリソンに、ゾラは読んでいないと言っているが、1885年までには間違いなく読んだとされている。「ギッシングは自らの読書によってフランスとロシアで起こっていることを知っていた。そしてすくなくともこの数年間はこの流れにそっていた」(Collie, *George Gissing* 79)。⁷ コリーは自然主義の方法を使っているものとして『民衆』、『サーザ』、『ネザー・ワールド』をあげている。

ギッシングが貧困を描いたのは大陸の自然主義文学の影響はあるにしろ、クラクンウェル出身の風刺画家ホガースの絵に触発された点もある。少年時代、ウェイクフィールドの自宅にホガースの絵があり、その影響が指摘されている。⁸ ホガースが絵で表現したものをギッシングは文章で表現したといえる。『ネザー・ワールド』を書くとき、ホガースの「ジン横丁」などが頭にあつたろう。

さらに、この小説が自分の体験に根差したものであることは疑い得ない。学生時代から貧困は経験している。イギリスを追われてアメリカを放浪中、彼は餓死すれすれの生活を強いられた。収入は新聞雑誌からのわずかの原稿料しかなかったのでピーナッツだけで飢えをしのいでいたと言う。⁹

ロンドンにもどつてからも彼は支出を抑えるため下宿代の安い地域に住ん

でいた。そのときのことは『ヘンリー・ライクロフトの私記』でも触れられている。その過程でそこに住む貧民の生活を見た。当然、売春婦もアルコール依存症も知っている。そういう生活にあえぐ人たちの姿を内側から描いた。どん底の人たちの日常の暮らし方、考え方、心理をつぶさにギッシングは知っていた。外部の人たちの想像だけでは書けないことを書いたのである。実際、イギリスの小説家のなかで、彼ほど、悲惨な労働者たちの生活を巧みに描いた者はいない。この点では彼はイギリス小説に新しい世界を持ちこんだのである。

底辺に住む人たちの生活の特徴はいうまでもないことではあるが、賃金が低いことである。収入さえよければ種々の問題は解決されるのだが、収入が少ないため、悲惨な生活になる。チャールズ・ブース (Charles Booth) は『ロンドン市民の生活と労働』 (*Life and Labour of the People in London*, 1891-1903) でロンドンの労働者の生活の貧困度を調査している。この本の初版は1889-91年であるから、『ネザー・ワールド』の時代とほぼ一致する。週給21シリングと22シリングの間に「貧困線」を引き、「貧困線」以上の者は普通の生活ができるとした。結果は貧困線以上の者が約70パーセント、以下の者が約30パーセントであった。貧困線以下は貧困の度合いによって「貧困」「極貧」「最下層」に分類することができる。¹⁰

スノードン老人は25歳のころ週給25シリング稼げるようになった。それで結婚する気持になった(173)。子供が生まれてもこの収入で貯金することを若い日のスノードンは考えた。これはまだ「大不況」が来る前のことであろう。

作品の第3章で失業したヒューイトが職探しをしているとき週給15シリングで窓ふきの仕事があったら、500人集まったと書いてある。「嘘だと思ukai。あの近所の奴に聞いてみるよ。並んでたんだ、500人だぜ！」(22)ブースの数字と比較してみてもいかに低賃金であるかが分かる。さらにそういう口さえ容易にはみつからぬことが分かる。娘のクレアラは便箋に版木を押す仕事で週に13シリング稼げる予定だ(81)。

キャンディ夫人の息子のスティーヴンは酒場に勤めていて朝の8時から真夜中まで16時間労働をしているが、1日ビールは3パイント飲めるものの週給は10シリングである。妹のペニロウフは輸出用のシャツの縫製の仕事をしている。1日15時間働いて10ペンス稼いでいる(12ペンスで1シリング)。支出は1日分のミルクは半ペニー、紅茶1ペニー、石炭3キロ1ペニーである(76)。

収入が少なくても自分の住む家が確保されていれば何とか暮らしていけるかも知れない。ところが住宅事情がひどく悪い。彼らは部屋を借りて住んでいる。その部屋代が彼らの収入の割にひどく高い。生活を圧迫しているのは下宿代である。シドニーはクラークンウェル・グリーンでヒューイットが演説しているのを聞く。彼は家賃が高いことを非難している。

Rent!—it was a subject the poor fellow could speak to some purpose. What was the difficulty a London workman found in making both ends meet? Wasn't it that accursed law by which the owner of property can make him pay a half, and often more, of his earnings for permission to put his wife and children under a roof? (182)

家賃が高いために住宅環境がひどく悪くなる。狭い空間にひしめいて住むことになる。キャンディ夫人が住んでいる下宿は次のように描写されている。「全部で7室ある。各部屋に一家族ずつ住んでいる。1つ屋根の下に25人が寝起きしている。夫婦者と子供たちだ。家賃の最低は4シリング6ペンスだ」(249)。ハウブ家では夫婦と15歳、12歳、3歳の子供たちが同じ部屋に住んでいる。週給15シリングの職に500人も応募するような状況では、1部屋に週4シリング6ペンスの家賃はつらい。ヒューイットがクラークンウェル・グリーンで抗議しているように、家賃は労働者の収入の半分か、それ以上である。これが労働者の家計をひどく圧迫している。

作品中には飢えと寒さという言葉がよくでてくる。冒頭の場面で雨に濡れたジェインがシドニーから上着を着せてもらう。衣食たりている現在の日本の状態からは想像するのが困難である。彼女はろくに着ていない。だから上着を着せてもらったことを、それ以後も恩に感じている。そしてそれをシドニーの愛情の象徴としてしばしば思い出す。

寒さも現在では想像できない。沢山着るものがあればロンドンの寒さはしのげるかも知れないが、キャンディ夫人は着ているのは「古い掛け布団で作った服一着とショールだけだ。履物は別として、身につけているのは、正真正銘この2点だけだ」(248)。石炭を十分買うことができず、キャンディ夫人は町中で石炭運搬車の後を追ひ、落ちた石炭を拾った。

労働者の使う言葉にも注意する必要がある。彼らの使う言葉は上の階級の使う言葉とは違う。ごく些細なことで子供を怒るとき、ひとりの脳みそをたたき出し、次の子供のはらわたを抜き、そのまた次の子供の目玉をくり抜くと脅かす。「上の世界で乳母か母親が、『怒りますよ!』と言うところを、どん底では『てめいのどたま、へし折ってやる!』と言う。こちらで『本当にしょ

うがない子ね』と言うところを、あちらでは『ぶっころすぞ!』と言う』(249)。

上の階級の人たちはこういう言葉使いをいやがる。ところがどん底の人たちは気にしないのである。慈善の炊き出しをするとき、バタビー (Batterby) 夫人は労働者に向かってすごく汚い言葉を使っていると上の階級の慈善事業家ミス・ラント (Lant) が批判する。しかしその方がどん底の人たちには親しみを感じさせるのである。それが上の階級の人たちには理解できない。

慈善についても貧しい労働者は違った考えをもっている。上の階級の者は慈善をしているのだから感謝しろと思う。しかし違う。下積みの人々は炊き出しを受けてそれで満足するかと思うとそうではない。不満になった貧者のひとりがスープをおちまけてしまうところがある。自分たちが施しを受けているにもかかわらずこういうことをすることは考えられないことではあるが、ここにスラムに住む者たちのもつ、屈折した気持を読みとることができる。ひとつには上の階級に対する抑えられた怒りがある。上の階級は自分たちに払うべきものも払わず搾取しておきながら、施しをすると思着せがましいことをいう。もし施しの気持が本当にあるならば、搾取をやめて所得を分配しろという気持がある。施しはおためごかしである。

苦しい生活をさらに惨めにしているのはアルコール依存である。第8章で言及されているキャンディ夫人の部屋には色つきの5枚のカードがある。これは禁酒の誓いのカードで、署名することで誓いをたてる。いくら署名して禁酒を誓っても効き目がない。新しいカードの署名は乱れていると言う。酒に酔って署名しているということだ。上の階級の人たちは、酒を飲むからいけないのだ、飲まなければ何とか暮らしていけるのだと考える。しかし、酒を飲んで酔っていなければ惨めさに耐えることができないという気持も察する必要がある。

また犯罪も貧困な人々のあいだには多い。作品中ではヒューイットの妻のマーガレットの犯罪のことが書かれている。ヒューイットと結婚する前、彼女は縫製工場で働いていたが、そのとき盗みを働いた。仕上がったジャケット6着(5ポンド相当)を盗んだのである。裁判になりマーガレットは有罪を認めた。雇い主は尋問されて週給4シリングだと答えた(20シリングで1ポンド)。食事はついていないという。もし自分の住まいさえ確保されていて食費だけを収入でまかなうのであれば、どうにか生きていくことはできるかも知れないのだが、前述の4シリング6ペンスまでは行かないとしても、下宿の部屋代を自分の収入から出さねばならないから食費にまわす金はないの

である。「被告は尋問されると、3日間何も食べていなかったの、誘惑に負けた。もっとましな仕事がほしかったと言った」(54)。判事は被告に同情はしたが、犯罪は犯罪だとして禁固6週間を言い渡した。彼女は「正直で勤勉」(54)という評判であった。しかしこのような犯罪に走らざるを得ないのは貧困だからである。

ボブ・ヒューイットは食べていけないような収入ではなかったが賤金づくりに走る。これも貧困で金銭の誘惑に勝てないのである。貧困が人間を墮落させる。

貧困によってまた健康を害する。マーガレットが刑務所を出たあと、妻をなくしていたヒューイットは、彼女に同情して結婚した。それで彼女は飢える心配は少なくなったが、ずっと病気がちであった。そして30代で死んでしまう。貧困のために長生きはできないのである。

第3節 労働者の個性の発見

この作品のなかでギッシングは貧しい労働者の生活を克明に描き出してはいるが、ブースのように貧困の調査をしているわけではない。エンゲルスのように労働者の全体像をつかむのが目的ではない。小説家としてのギッシングの最大の関心はそういう環境のなかで生きている人間の個性であり、そこから生じる人間関係である。

上の階級の人たちはややもすれば貧乏な労働者階級の人たちは皆一様だと考えがちである。チャーティスト運動から連想して労働者はすべて戦闘的と思うかもしれない。たとえばヒューイットのように、広場で抗議の演説をする労働者がいる。当然支配階級にたいする不満はあった。しかし労働者はすべて政治的かといえはそうとは限らない。またひとりの労働者でも時期によって変わる。ヒューイットは最初はかなり政治的であったが、改革に対する情熱を失って行く。

他方、労働者は貧乏だから物質欲しかなく、ずるく、人をだますことしか考えないと思うかも知れない。たしかにジョウゼフのような男は金しか頭にない。クレムとの結婚も金目当てである。父親が金を持っていることを知ると何とかして取ろうとする。しかしこのような人間は上の階級にもいるから貧民だけの特徴ではないが、この作品では物欲はかなり露骨に描かれている。

あるいは労働者階級は、ただ怠惰で飲んだくれとしか見えないかも知れな

い。たしかにキャンディ夫人のようにアルコール依存症の者はいる。外側から見てるとややもすれば労働者階級は一様に見える。しかし内側から見ればそうではないことが分かる。

クレムのような女性も貧しい階級の典型といえる。¹¹ 自分も貧乏なのであるが、貧乏で弱い立場にいる人をいじめめる。遠慮会釈なく残忍である。ジェインをいじめめる。遺体の置かれている部屋にジェインを夜寝かそうとする。いやがっているのにもかかわらず、そうさせようとする。弱い者いじめはどの人間にもあるにせよ、ほかに楽しみがあればそちらのほうに向く。しかし貧乏でほかに楽しむ方法がなければ弱い者いじめに楽しみを見つけることになる。あたかも娯楽で熊いじめや牛いじめをするようにいじめて喜ぶ。一番安上がりな楽しみなのである。もし旅行とかほかの娯楽がある身分であるならば、いじめばかりはしていないであろう。しかしクレムはそういう余裕はないのである。

他方、クレムのボブにたいする執着は何であるか。労働者の女性が生きるためには結婚は必要である。女性は働くことを期待されず、結婚が就職を意味していた時代にあつては結婚は女性にとって必須であった。結婚しないで働く場合は厳しい労働を強いられる。女性にはまともな職業はなく長時間の苛酷な労働が待っている。

クレムはそれを知っている。だから結婚したい。ボブは手に職がある。最低の生活はできる技術を持つ。これはクレムにとって大変な魅力なのである。しかしクレムのボブにたいする執着はそれだけでは説明できない。金を稼ぐ男ならだれでもよいのかというとそうではない。クレムはボブを愛している。彼女の言葉づかいは乱暴だし、表現はあらっほく粗野な感じを与えるものの、ボブにたいする強い愛情があることは明らかである。ボブの気持がペニロウフに移ったのではないかと思ったときのクレムの逆上は当然である。ボブがほかの女のところへ行きたいのなら行かせろと考えるのはクレムの必死の気持が分からないからである。クレムはジョウゼフと結婚したが、愛しているわけではない。これは打算的な結婚である。ボブを忘れることができない。

スノードン老人は読書はしなくても人生から知恵を学んだと描写されている。当時の労働者階級だから学校で学ぶ機会は限られている。まして大学に行くことはできない。本を手取る機会はない。ほとんど文字も読めない。だから大学で学ぶような知識に欠けることはある。だが知恵がないかということそれは大学で学んだ人に劣らない。人生経験から知恵を学ぶのである。ス

ノードン老人は読書によってではなく、経験から困っている人を助けなければならぬことを知った。いくら大学で学んで知識はあっても私利私欲でしか動かない人は多い。スノードン老人は下積の苦しい経験から苦しむ人間の存在を知り、そういう人たちを助けることの必要性を知ったのである。

しかし老人は「狂信者特有の恐ろしい情熱をたぎらせた目」(308)が表すように非情なまでに頭が凝り固まってしまった。自分の信念なら仕方がないが、自分の慈善活動の考えをジェインに押し付けるのである。あたかも専制君主のようである。そういう種類の能力のない孫に過大な要求をしているのだが、そのことに気がつかない。慈善家のミス・ラントの話を書くのはよい。しかし他人に過大な要求をしてはならない。

老人はたしかに立派な理想を持っている。しかしちゃんと人間を描きだすことを作者は忘れていない。老人はかたくなである。貧者を助けるという理想を実現しなければならないと固く信じ切っている。頑固なのが老人の欠点であるが、その欠点をうまく描いている。欠点こそが個性なのである。

老人は「サマリア人」の話のジェインに暗誦させる。そして「思いやり」が人間にとって一番大事だと言う。そのことはとてもいい。しかし頑固で押し付けがましいことに自分が気がついていない。

クレアラは自己中心である。彼女は下の階級から脱出したいという自分の気持ちを抑えることができない。いくらシドニーが親切な説得をしても聞き入れない。ひたすら女優として有名になろうとする。魔性とでもいえるものが彼女のなかに潜んでいる。

初等教育を受けたクレアラの場合も閉ざされた状況にいる。彼女は自分を生かすような職業には就けない。自分の才能を発揮する機会が得られないまま、肉体労働をする以外に道はない。彼女が不満に思うのも無理はない。もしふさわしい職業に就けたら、これほど悲惨な人生を歩まなかったかもしれない。

ヒューイト家に400ポンドの遺産が入ったのが、皮肉なことではあるが不幸の原因になった。ましな生活ができたのでクレアラは鼻が高くなった。自己中心で我ままになった。自分の位置に満足できなくなった。劇団に入っても自分が主演にならないと満足できなかった。自分がたとえ端役ではあっても芝居の成功のためには全力で演技しなければならないのにそうしない。「クレアラは馴染みの役だ。どう見てもつまらぬ役で、馬鹿な台詞を言わねばならないのが、今晚は特別腹立たしかった。いつでもふくれ面で演技した。大向こう受けを狙う劇作家の術中にはまる観客を軽蔑した」(204)。

主役に抜擢されたことで仲間の嫉妬を買ひ、硫酸をかけられた。そしてもどってきてシドニーと結婚した。ほかには生きる方法はないのだから、クレアラは感謝し満足すべきなのに文句を言う。心中でどう思うかは別として不満を外にもらすべきではないのだが、そうしてしまう。母親は違うとは言え、父の家で弟妹たちの面倒をみるべきなのに、その気持が全然ない。

'What have we to do with them? How can you be expected to keep a whole family? It isn't fair to you or to me. You sacrifice me to them. It's nothing to you what I endure, so long as they are kept in comfort!' (376)

女優としての夢を砕かれたあと、幸いシドニーと結婚できるが、彼に感謝することはない。シドニーはクレアラに文句を言われながらも必死になって耐えて、クレアラにも子供たちにもよかれと頑張っている。しかしそういう彼を理解しようとしない。一番世話になっているにもかかわらず不満をぶつける。「あたしから逃げ出してくれた方が親切だったのに。あたしずっと前に自殺して、けりをつけてたろうよ。あたしと結婚したのは、偉いことをしたと思ってるんだ」(376-67)。しかし実際は自殺する勇気もなく、シドニーを頼ってやってきたのである。それなのに感謝することはない。クレアラは悲惨な経験をしたにもかかわらず、成長することはなく、いつまでたっても我ままである。

クレアラは芝居の主役に抜擢されたばかりに友人に嫉妬されて顔に硫酸をかけられてしまう。ここでは人間にある嫉妬、羨望の恐ろしさが描かれている。とくに自分に近い関係者の嫉妬、羨望が恐ろしいことを述べている。嫉妬、羨望は労働者階級に限ったことではなく、すべての人間に共通したことである。

ヒューイットは社会の矛盾を批判する。しかしただ批判するだけなら、それは思想であって小説ではない。作者はヒューイットを紋切型の戦闘的労働者として描いているだけではない。生きている人間としての種々の面を描いている。彼は労働者として金持ちに反抗する姿勢をとる。しかし金持ちをうらやみ、できることなら金持ちになりたいと思う。収入がよくなればすぐよい下宿に移る。彼はむら気である。行動力はあるが、頑固で他人の忠告は絶対にきかないタイプである。そのため400ポンドの遺産をむざむざ失ってしまう。自己中心である。クレアラが家出するとすべてシドニーのせいにして恨む。彼女が顔を傷つけられてもどってくると、シドニーに結婚させたい。以前のいきさつはすっかり忘れてしまう。ヒューイットは自己中心だが、そ

れが人間であり、だれも彼を批判できない。

ジェインは労働者階級のなかにはいないのではないかと思われるような優しい女性だ。貧しい人たち、困った人たちに同情し援助の手をさしのべている。しかし作者は彼女を理想化していない。悪い環境にいたためにもの覚えがわるい、と書かれてある。「庶民の子供たちがごく簡単に覚えられる初歩的知識が、ひどく努力しなければ呑み込めない」(135-36)。シドニーをクレアラに取られ、失恋した。シドニーと結婚して家庭に入るのが彼女にとって一番いい道だったのに。彼女は報われなければならないが、報われることはない。

また、ペニロウフの兄で18歳のスティーヴンのようにアルコール依存症の母親を抱えて、しがらみ仕事をしながら、母親を養っている男がいる。彼は居酒屋のウェーターをしている。週給10シリング。毎日3ポイントビールが飲めるが、週日は朝の8時から真夜中までの勤務。日曜日は居酒屋の営業が許可されている時間働く。1ヶ月に1回、6時過ぎに暇がもらえるだけである。1日16時間の労働で、真夜中過ぎに帰宅する。母子で住み、「いつもパンは切らさぬ」(249)ようにしている。自分にはアルコール依存症の母を治すことはできない。自分の収入からご馳走を買ってきたり、寒さを防ぐための十分なことをしてやることはできない。ただ母親のためにパンだけは切らさないようにしている。自分の分に応じたことだけはする気持がある。

「スティーヴンは事態を達観している。母親は、もちろん、酒で体をこわして死ぬだろう。だからどうなのだ。自分は心臓が悪い。いずれ行き倒れになるだろう。どうなっても運命なのだ」(249)。家賃にまわす金は母親が飲んでしまって、家賃を払えないので、家主にそのかたに家具、ふとんまで持っていかれてしまった。一緒にいることで難儀はするが、アルコール依存症の母を見捨てない。

気立てのいい男であり、ひどい環境にあってもそのために悪に走るということはない。警察に追われて逃げ込んできたボブを泊めてやり水を汲んできてやる。水を汲んできてやるくらいなら、その気持さえあればだれにでもできることなのである。

同じ家に住む者たちが酒を飲んだりして騒ぎ始めた。キャンディ夫人は眠れない。

Mrs. Candy stirred, and, after a few vain efforts to raise herself, started up suddenly. She fixed her eyes on the fire, which was just beginning to blaze, and uttered

a dreadful cry, a shriek of mad terror.

'O God!' groaned her son. 'I hope it ain't goin' to be one of her bad nights. Mother, mother! What's wrong with you? See, come to the fire an' warm yourself, mother.'
(341-42)

ここにはアルコール依存症の人間の恐ろしい姿が描かれている。ステイーヴンはそんな母親にやさしい声をかける。

ステイーヴンは人生を達観し、いらいらすることはない。自分のできることはして、それ以上のことは天命を待つ態度である。彼は作品中では端役に過ぎないが、作者の鋭い目は、的確に人間の一典型をとらえている。上の階級の人はややもすると、こういう人間は労働者のなかにはいないと思ってしまう。作者のなみなみならぬ洞察力と表現力をここに見ることができる。

性格は運命である。性格をこえては人間は生きることとはできない。それぞれ性格、個性にしたがって生きている。どん底に住む人々も金持ち階級と同じ人間であり、それぞれの性格をもっている。その姿を作者は描く。労働者のなかにも、他の階級とまったく同じように種々の人間がいて、それぞれの生き方をしている。その点でこの作品は、上の階級の人たちにたいして労働者階級の人間を一様に見てはならないと警告している。

第4節 運命のいたずら

コルグはハーディと比較しながらギッシングの運命観を述べている。「他方、ギッシングの小説では宇宙の秩序の悪意は人間の営みに現れる」(Korg 115)。

人生は思った通りには行かぬ。スノードン老人の理想はすばらしいのであるが、その理想通りにはことは運ばない。ジェインは祖父の財産で幸福に生活できる筈であった。そして慈善の方に使えたであろう。しかし現実にはそうならないのだ。遺言状の書き直しもそのひとつだ。遺言状でジェインに遺産を渡そうとした。そのあとその遺言状を破棄するという手紙を法律事務所に出した。ところが新しい遺言状を書かないうちに急死してしまった。新しい遺言状があれば、すべて息子ジョウゼフのところに行くことはなかったであろう。もうすこし死ぬのが遅かったら、遺産はジェインのもとに行き、ジョウゼフに浪費されることはなく、貧民救済に使われることになったであろう。ちょっとしたタイミングの悪さで運命が変わって行く。

シドニーとジェインが結婚する可能性はあった。ジェインはシドニーを愛

していた。クレアラが去ったあと、シドニーはジェインに好意をもった。老人から財産のことをジェインは聞いていないということを知って、シドニーはフェアではないと思い、求婚をためらい先に延ばした。そのため結婚することはなかった。

クレアラは顔に硫酸をかけられる。運命の悪意がある。もし主役の女優が劇団の座長と対立して辞めることがなければクレアラは文句はいいながらも劇団にとどまってヒューイト家に戻ることはなかったであろう。主役の女優が辞めたとしても代役としてグレースが主役を勤めたであろう。ところがたまたま座長の思いつきでクレアラが主役になってしまった。偶然が重なってクレアラが主役に抜擢された。彼女が主役になることがなかったなら、不幸は来なかったであろう。偶然が悪い方向にクレアラを導いた。彼女が女優を続けていたら、シドニーはジェインと結婚することになっただろう。ジェインも一生に一度の恋を実らすことができたであろう。人間がどうすることもできない運命の悪意が人間の生活を狂わせて行く。

シドニーは善意を持って生きているが、それによって幸せになるわけではない。クレアラと結婚してもあまり感謝されない。思い通りにはならない。ハッピーエンディングにはならない。シドニーに救いはあるのだろうか。ただ耐えて生きていくことが救いである。彼はヒューイトの家族のためになり、クレアラの支えになっている。

スティーヴンも同じである。彼がひどい環境で暮らすのも運命の悪意によってとしか言えない。しかし彼は運命を甘受する。収入はすくなく、たいして助けにはならないが母親に親切にしている。報われることはないのだが、自分の能力の範囲内で自分以外の人のために役に立っている。これを讀むと読者は救われる。

この作品には、運命のいたずらとしか言えないものが、人間の運命を変えて行くことが書かれてある。そのため不幸になった者は、運命を嘆いていても仕方ない。運命の悪意のいたずらに負けないで生きて行かねばならないのである。

第5節 一隅を照らす

ギッシングは「地の塩」(“The Salt of the Earth,” *The House of Cobwebs*, 1906)という短篇を書いている。そのテーマは善意の人は報われないということである。旧約聖書のヨブがサタンによって試されたように、運命に試されなが

ら我慢して生きていくのである。

シドニーは「地の塩」のような存在である。¹² 目立たぬ存在である。しかしそういう存在がなくなって、私利私欲に走る人間しかりなくなくなった場合を考えてみると「地の塩」的人間がいかに重要か分かる。

シドニーは若いとき芸術家、正義を守る指導者になろうと夢見た。しかしその夢は実現しなかった。周囲の環境によって押し潰されてしまった。しかし弱い立場の人々を励まし助けた。それは人々のためになることだった。しかしかならずしも感謝はされないのである。あれほど自己犠牲の覚悟でクレアラを助けるために彼女と結婚したのだが、しかしクレアラから感謝されない。結婚してくれなかったら、早々に自殺したろうにと嫌味をいわれる。彼はただ耐えるだけなのである。

ジェインは祖父が期待したような大規模な貧民救済事業をすることはなかった。祖父の金は父に奪われた。自分の恋人さえ失った。もしシドニーと結婚できれば、ジェインは遺産をもらえなくても、他のすべてを失っても我慢できたであろうにシドニーまで失ってしまう。しかし近くの人々のために役に立った。夫婦喧嘩の後、夫に家出をされたベッシー・バイアスを慰め、赤子に死なれたペニロウフを慰めた。求婚を断り、自活した。父から2ポンドの仕送りがあるはずなのだが、それももらわないという。自分で働き、自分は下宿の1部屋に住み、自活しようとする。彼女は世間的な意味で報われることがない。しかし彼女がいることで暗いどん底は明るくなり笑い声が起る。一隅を照らしている貴重な存在である。

シドニーとジェインは社会のなかで目立つ存在ではない。名誉や金銭的な基準からいえば取るに足らぬ存在である。しかし不幸な人々の味方になって、自分より弱い心の人々を慰める。二人が住む社会の片隅は、まったくの暗闇ではない。確かに、悲しみに見舞われ、目指すささやかな目標さえ達せられないこともあるだろう。しかし少なくとも、二人は、どん底の奈落の暗闇のなかで敗残者の群れにささやかな光を投げかける。作品の最後は次のように結ばれている。

Unmarked, unencouraged save by their love of uprightness and mercy, they stood by the side of those more hapless, brought some comfort to hearts less courageous than theirs. Where they abode it was not all dark, sorrow certainly awaited them, perchance defeat in even the humblest aims that they had set themselves; but at least their lives would remain a protest against those brute force of society which fill with wreck the abysses of the nether world. (392)

註

テキストは George Gissing, *The Nether World*, *The World's Classics*, edited by Stephen Gill (Oxford: Oxford UP, 1992) を使用した。

- 1 ロンドンのセント・ジャイルズの貧民街について次のように述べられている。「完全な窓ガラスなどほとんど見あたらないし、壁はくだけ、入口の戸柱や窓枠はこわれてがたがたになり、ドアは古板をよせ集めてうちつけてあるか、あるいはまったくつけていない——このこの泥棒街では盗むものがなにもないから、ドアの必要さえないのである。汚物と塵埃の山があたりいぢめんにあり、またドアの前におちまけられたきたない液体はより集まって水たまりとなり、鼻もちならない悪臭を発散している。」フリートリビ・エンゲルス『イギリスの労働者階級の状態——19世紀のロンドンとマンチェスター (1)』全集刊行委員会訳 (大月書店, 1978) 92-93。
- 2 村岡健次・木畑洋一編『イギリス史3—近現代』(山川出版社, 1999) 169。
- 3 クリストファー・ヒバート『ロンドン—ある都市の伝記』横山徳爾訳 (朝日新聞社, 1997) 354。
- 4 元来は現在の広場よりも広く「セント・ジョン修道院と北のセント・メアリ尼僧院の間の公共の地域で、900年以上にわたって公共のスペースであった」。*Clerkenwell Historic Trail* (London: Towards Historic Clerkenwell Assn., 1998) 10。
- 5 Peter Ackroyd, *London: Biography* (London: Chatto and Windus, 2000) 465-73。また次のような事件もあった。「1887年11月13日、ウィリアム・モリス、アニー・ベザント、エリノア・マルクス、ジョージ・バーナード・ショーはロンドン愛国者協会の本部での集会の後、外の [クラークンウェル] グリーンに集合して、大群衆の核となり、アイルランド問題についての政府の政策に抗議してトラファルガル広場に向かって行進した。この結果軍隊と警察隊と衝突し「血の日曜日」になったが、とくにモリスはイギリスにおける政治的暴力の限界を知った」。Richard Tames, *Clerkenwell and Finsbury Past* (London: Historical Pubs., 1999) 131。
- 6 「クラークンウェルでの労働者階級の生活の描写の残酷なまでの正確さはイギリスの読者に新しい種類のリアリズムを紹介した。幾世代にわたるイギリスの小説にも、このようなリアリズムの作品はないのである」(Sloan 76)。
- 7 コリーはギッシングにたいする大陸の自然主義文学の影響を重視する立場をとっている。ただゾラとは一線を画すべきであるという意見はある。出版後まもない1889年9月の書評には次のようにある。「私はこの作品をリアリストックとよんだ。しかし、それは幸いにもイギリスの作品である。ゾラとその一派の作品にある、心ある読者に嫌悪感を抱かせる、あのおぞましい自然主義はな

- いのである」(Coustillas and Partridge 142)。
- 8 「ホガースの皮肉と正確さのような性質がギッシングの小説の特徴である。彼の貧困者と彼らの生活にたいする永続的な興味は最初はホガースに触発されたといえよう」(Korg 9)。
 - 9 「立売商人から買った一握りのピーナッツで飢えをしのいだ。貧困のどん底であった」(Korg 19)。
 - 10 長島伸一『世紀末までの大英帝国—近代イギリス社会生活史素描』(法政大学出版局, 1996) 238。
 - 11 クレムは読者により感じはあたえないのだが、生きた人物である。「しかし小説における支配的な人物はジェイン・スノードンではなくて、残忍で激しい、がみがみ女クレム・ペコヴァである」(Donnelly 119)。
 - 12 ハルペリンはシドニーを「ギッシングの代弁者」“Gissing-persona” (Halperin 110) と考えている。

(倉持三郎)